
Seven Days Journey

ALISA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seven Days Journey

【Nコード】

N4964Y

【作者名】

ALISA

【あらすじ】

とある少女と、とある騎士が、とある森で出会った。それから始まる、たった7日間の生の軌跡の物語。行き着く先は、どこだろう？ 異端少女とわけあり騎士の津々浦々旅模様。
モバゲー（E）で連載中のファンタジー作品です。

0 (前書き)

懲りずにまた投稿。お楽しみいただければ幸いです。

冷気を帯びた風が、東から西へと大陸全土を吹き抜ける。それは春風と呼ぶにはいささか肌に厳しいものだったが、人々はあたたかな陽気とともに春を届けてくれる息吹を祝福した。

今年も、豊穣の春季がやってきた、と。

この世界に大陸はひとつしか存在しない。すなわち、数多の生物が生息する『ユレーヴィア大陸』である。それは大きく3つの国、国家に分けられる。

夏でも溶けることはない永久凍土をもつ軍国家、北方のザラミス。全土の1/4を砂漠で埋め尽くされている民族国家、南方のローデルナット。

そして、そびえたつ山々と大きな河川を有する最も強大な王国、東西に延びるレフィノア。

三者は互いに干渉しあいながら幾度となく戦争を経験したが、政略結婚や和平条約を結ぶことによって事なきを得、ここ400年

ほどは大きな争いが起こっていない。絵にかいたような平和な日々が各国に訪れていた。

特にレフィノア王国では、恵まれた気候と土地柄を生かした栽培、海港都市による貿易などをさかんに行い、国力を養ってきた。

国民には賢王と名高いシユヴァイツ4世の下、幸福な生活が約束されていたし、事実、人々は何の不満も無く現在の暮らしに甘んじていた。

だが、人々は知らなかったのだ。

国の運命を背負った、とある人間のことなど。国が古より隠し続けてきた、重大な秘密など

ひゅう、と音を鳴らして風が駆ける。周辺の木々がざわめき、枝を揺らした。

ともあれ、レフィノア王国の最西端、半島の隅に位置している小さな小さな森の奥にも、その風は届いていた。

周辺の村人も立ち寄らないような鬱蒼とした森の中。人が住んでいるのかどうかすら不明な辺境のこの地で、物語は、ひっそりと幕を開ける

レフィノア暦五百九十二年 第三月十二日

木々は太陽光を遮りながら揺らめき、ちらちらと、温かな木漏れ日を生み出している。生息する小鳥や小動物たちはせわしなく鳴き、動き回り、ようやく暖かくなってきた春の大気を楽しんでいた。

誰の元にも平等に訪れた、穏やかな朝。

レフィノアの端っこにあるこの森の中は、見るからに平常で、平和であった。

しかし、突如として、

森中を根こそぎ破壊したのではないのか、と紛うほどの轟音が鳴り響いた。先程までのんきに鳴いていた小鳥たちは慌てて飛び去り、青空を舞う。もうもうと土ぼこりがたち、澄んだ空を灰色に濁らせた。

見通しが悪く、しばらくの間、何が起こったのか誰にも何も分からぬ状況

その煙幕が風によって一掃され、ようやく視界がクリアになった。

そこは爆心地のように地面がぼこりと陥没し、周辺には草木がゴムのように散乱していた。そして、まるで隕石が降ってきたかのよ

うな巨大なクレーターができています。

その中心には 1人の人間が倒れていた。

それは真っ黒なマントを着、大ぶりの剣を一振り携えた、男だった。しかし、黒髪の下の瞼は硬く閉じられていて、その双眸を見ることはできない。

よく見るとその男には右肩からわき腹にかけて大きな傷があった。まだ新しい傷なのか、血が土と混ざってじわりと大地に黒い染みをつくる。

「……………」

うめき声が倒れている人間からあがる。意識はあるようだったが、目も開けられないような状況故に体力は限界に近いだろう。体もまったく動かせない。

男はこれまでか、と一種の諦めのようなことを思いながら、とうとう頭を垂れ、意識を飛ばした。

だが、真っ白に染まっていく彼の頭の中でかすかに何者かの声が交った気がした。

コトコト…トントントン…

規則正しく聞こえる耳に心地よい音が、男を覚醒へと導いた。

「……………んう、」

男はつめくように声を出し、ぼんやりとした頭のままうつすらと目を開けてみる。

まず、最初に目に入ったのは、丸太小屋の天井。

木を組んだだけの質素な造りだ。そこらに転がっているような家屋いや、家というよりは小屋と言った方が適切だろう。そのくらい粗野な印象を受けた。

そして、次に男は自身が簡素なベッドに横たわっていることに気付いた。彼の体軀には少し小さいくらいの幅の寝台に、茶色い毛布が掛けられている。

「ここ、は……………」

何もない空間で彼はぼつりとつぶやきを漏らす、返事はない。ゆつくりとした動作で上体を起こすと、負傷していたはずの己の身体には真新しい包帯が巻いてあった。体中にあつた細かい傷にも手当てが施されている。

誰かに、助けられた。

無様に地に伏せていた自分が自動的にここに来たはずはない。男は容易にこの考えにたどり着いたものの、次にまた新たな疑問が浮上する。

すなわち、誰に助けられたのかという疑問。

確か最後に見たのは森。それもそのだいたい奥深くのような風景……そこに誰かが通りがかったのだろうか？いや、あのような場所に住む者などいないだろう。むしろ熊のような動物に喰われる可能性の方が高かったといえる。

では、一体、どうやって……？

カタン……………

「！」

男が内心で首を傾げていると、奥から小さな物音が聞こえた。

明らかに人の気配がする。それが段々と近付いて来るのが肌で感じられた。

男は無言で、ベッドの上で身を硬くした。…が、

「あ、起きた？」

その人物は、いともたやすく姿を現した。

力の抜けるような、ほんわかした口調でそう言うと、ベッドの男の方へ歩み寄る。

「…具合はどうか。一応手当てはしたんだけど、あまり動かない方がいいよ。」

なにせだいぶ深い傷だったからね、と続けて、その人はにこりと口元を緩ませる。

非常に友好的で温和な態度だ。しかし話しかけられている当人は訝しげに眉をひそめ、相手を凝視していた。

ひょっこりと顔をのぞかせたのは、予想通り一人の人間だった。

背は高くないし、身体も小さい。声も高いから若い人間なのだろう

とは思う。

…思う、とはいささか不適切な表現だろう。面と向かって話しているのだから、何かを想像しているわけでもない。だが実際に目の前の人間からは、それくらいの情報しか得られなかった。

何故なら、（これが、男が不審に思った原因なのだが）そのヒトは白い布のような物で、顔の額から鼻にかけて覆い隠していたのだ。

まるで、『メカクシ』のように。かろうじて見えているのは頬、口元、前髪…とその程度だった。

なんだ、こいつ……？

全く奇怪な格好の人間を見つめ、男は警戒心を強めた。先程の証言によると、手当てをしてくれたのはこの人物に間違いならしい。だが、どうもまだ不信感はぬぐえなかった。

「……お前は、誰だ。何者だ？」

寝起きだからか、男はかすれた声でそう問う。すると、相手は少年のような、凜と澄んだ声で笑った。

「ふふ、なんだい。そのおっかない声は。そんなに怖がらなくてもいいじゃないか。」

「…怖がってなど、ないが。」

「またまた！。ちょっとビビっちゃったんじゃないの？僕を見てさ。」

「……………」

ふざけたような、底抜けに明るい声に、多少イラつく。
いいからさっさと話せ、という彼の不機嫌を感じとったのか、少年は慌てて取り繕った。

「ああ、まあ、いや。自己紹介だったよね？僕はアトラ。この小屋に住んでるんだ。」

「…アトラ？それだけか？姓は…？」

「さあね、覚えてないや。」

「（……覚えてない？）」

聞きながら、少し引つかかるものを感じる。
姓を知らないなど、ありえるだろうか。

この少年、見た所十はとうに過ぎていくくらいの年齢なのに……
話せない事情があるのか、それとも、名前すら偽名なのだろうか。

「なあ、アンタの名前は？」

思考に身をまかせていると、不意に少年から声がかかった。男は白い布に目を合わせる。

「ああ、俺は……そうだな、ルデイ、だ。」

「ルデイ、だけ？」

「そっちも姓を名乗っていないのだから、お互い様だろう。」

「はっ、そうだね。その通りだ。」

アトラと名乗った少年は、くすくすと笑い声を含ませながら、手探りで椅子を探し出し、ベッドの脇に座った。

その時、さつと窓から風が吹きこみ、屋内の空気をさらった。

座ったアトラの白い布がふわりと揺れ、ほんの少しルデイの手をかすめる。ルデイはその様子を横目に、再度アトラに話しかけた。

「…アトラと言ったか。助けてくれたことには礼を言う。」

「いいよ、別に。」

「ところで……ここはどこだ？」

するとアトラは意外そうな顔をした。実際に表情は見えないが、雰囲気でルディはそう感じた。

「『聖邪の森』……レフィノアの最西端の森だよ。なんだ、知らなかったのか？」

「ああ……」

「まあ、単なる小さな森だよ。あまり人は立ち寄らないんだけどね。」

「

アトラはそう呟くと、布の先端をくるくるともてあそんだ。

やはり、ここは最後に居た場所だった。森に住んでいるというこの少年に助けられたということか。

アトラの言葉にルディは一応、納得したように頷く。

「じゃあ、ついでにもう一つ聞くんが……」

「何？」

「…その布は、何なんだ？」

聞こうか聞かまいか悩んだが、やはり気になることは気になったので、ルディは素直に訪ねることにした。

包帯には見えない、ただの白い布。

人が来ないのなら、何故わざわざ素顔を隠す必要があるのか。それともルディが来ているからやむを得ず巻いているのか。

また、その下の素顔にも段々と興味がわき始めていたのだ。

「……………ああ、」

アトラは微かに口元を歪めた。だが顔のほとんどは隠されていた上、その変化もほんの微量だったため、ルディは気付かなかった。

「気付いちゃった？これ。」

「…目立ち過ぎて気にならない方がおかしい。」

「ふ、見苦しくてすまないね。実は僕、盲目なんだ。日の光にさらすと瞳が焼けてしまうらしいから、コレをつけてるってわけ。」

「……………！」

アトラは軽い口調で飄々と言い切った。だからこそ、ルディはさらに驚く。

「……………目が見えないのか？」

「うん。」

「…お前、家族は？」

「いないよ。僕ひとりだ。」

「む……………」

それきり、ルディは黙々と黙りこんだ。またこいつを不穩に思う要素が増えたと、しかめ面を隠せない。

人気のない森の奥の小屋に、一人で住む盲目の少年。

それはどう考えても異常だった。

「くくっ、変な声ー。」

しかし、そんなルデイの様子がおかしいのか、アトラはニヤニヤと笑う。

「そんで、ルデイさん。今度はこっちから聞いていい？」

「……………なんだ。」

…いちいち反応が癪に障る。ルデイは未だ不機嫌な顔のまま、アトラの方を向いた。アトラは満足気に笑い、言い放つ。

「アンタ、死神だろ？」

「……………は？」

唐突に突き付けられた言葉に、目を丸くする男。

……………死神？いや、今度こそ、意味が分からない。ルデイは自分の耳も頭も疑いたくなくなった。

「ねえ、僕がどう死ぬのか知ってるんだろ？教えてくれよ。病死？焼死？溺死？毒死？ああ、あんまり苦しめないやつがいいんだけどなあ。ずっと考えてたんだけど、こういうのって、自分で選べないの？」

だが、アトラは彼の反応などお構いなしにまくしたてる。どこか

狂気じみた興奮に、ルディは思わず圧倒された。

「……おい、ちょっと待て。」

「死神はカマとか持って、死人の魂を刈り取るのが仕事なんだってね？僕も一度見てみたいな。ね、魂ってどんな感じ？」

「……だから……っ」

「ああ、大丈夫。アンタの正体なんて誰にも言わないから。言う相手もないし。だからちよつとだけ」

「人の話を聞け！！」

御し難いスピードで右から左へと話が展開されていくのを、ルディは大声で遮った。このままでは本気で死神にされかねない。彼も必死であった。

「……ん？何さ。」

ルディの叫び声を聞き、アトラもいったん、口を閉ざした。

「……はあ。何を勘違いしているか知らないが……俺は死神ではない。」

「えー！そうなのっ!？」

「……普通に分かることだろうが。」

ルディはため息をつく。

むしろ、アトラが何故そんなに意外そうなのか、理解不能なルディだった。それでも、アトラはぶうつと頬を膨らます。

「だってさ、黒髪に赤眼なんて、死神そっくりじゃん！」

「どごその物語と一緒にするな……」

ルディはまた小さく嘆息し、大げさ気に手を振って見せた。

「どこからどう見ても、人間だろう。」

「…見えないけどね。まあ普通に考えれば、それはそうか。なーんだ、つまんないの。」

「……………」

まだ何か不満そうなアトラ。しかし、ルディが段々と暗いオーラを発散させていくのが感じられて、仕方なく話題を転換させた。

「じゃ、さ。ルディさんは何なの？」

「？」

「…こんな森の奥まで、何の御用？」

軽そうに、しかし少しの緊張感をこめてアトラは目の前の男に向かってそう言った。

実は、アトラが最も聞きかっただのはこの質問だった。

ここは、『聖邪の森』は、普段めつたに人が入らない。そこまで広くはないので抜けることは簡単だし、秋になればそこかしらで食物も実る。それでも人通りは年間を通して限りなく少ないのだ。

まあ、その理由もはっきり分かってるんだけどね。

アトラは自分自身にそう呟いて、自嘲気味に笑みを零す。

…とにかく、自分以外の人間はなかなか訪れないこの世捨て場のような場所に、何の目的があって近付いたのか。

そして、この男が偶然にここに入ったはずがない、とアトラは踏んでいた。

「……用、というか……」

「なに？」

「……いや……」

しかし、ルディはしどろもどろと呟き、ついには黙ってしまつ。どうにも気まずそうな、微妙な雰囲気携えて、それをアトラはさらに怪しんだ。

「ねえ何なの？アンタ、何者なんだよ？」

「……」

「僕は盲目ってことまで教えたんだよ？アンタの身の上話くらい、聞かせてよ。」

「……」

「ねえってば！」

アトラはずい、と身体を傾けてルディに迫る。勢いそのまま男の腕を掴むと、彼はビクリと手を震わせた。

そして、

「………分かった、言う。言うから放せ。」

少年の迫力に負けてか、ルディは観念したようにそう呟いた。ルディはちらつとアトラの方を向き、やがて口を開く。

「……俺は、騎士だ。王宮付き騎士団第七部隊所属。ここに来たのは単独任務のため、だ。」

「……騎士、さま？任務？」

「任務については口外出来ない。隊長に止められてるんで……」
「……………」

アトラは黙った。彼の職業を聞いて、瞬時に口をつぐんだ。そして、それを見たルディは。

「…………？」

静かに、驚いた。

目の前の少年の顔が歪んだ、気がしたのだ。顔も見えないのに、ハッキリと分かるその負の感情。

……一体どうしたというのか。男は、若干の焦りを覚えた。

「おい、坊主。どうした？」

「……なんでもないよ。それで、ルディさん。その怪我は任務中に……」
「……？」

「……あ、ああ。そうだが。」

本当にどうかしたのだろうか、とルディは不安になる。

少年の声の色やトーンは先程とは打って変わって重苦しく、暗いものだったから。

「……お勤め、御苦労さまだね。」

「…………？おい……包帯、換えないとね。水を汲んでくるよ。」

ぼつりと言葉をこぼした後、突如立ち上がるアトラ。水桶を抱え、パタパタと扉の方へ危なげも無く走って行く。

そして、ギイツと木材のきしむ音だけを残して森に消えた。

「……なん、なんだ。」

雰囲気は柔らかいままだった。口元も、笑っていた。それなのに、何故あんなに悲しそうに見えたのだろうか。

小屋を出ていった少年の心が読めず、ルディは茫然とするばかりだった。

外は晴天。心地よい風がアトラの髪や頬を撫でつける。

アトラは水音を立てながら、桶を湖にくぐらせた。ギリギリまで入れると、たつぷりとした水の重さを感じる。

ここの湖の水は、人間の使う用水と繋がっていないので、汚染されておらずそのまま飲めるほど澄んでいる。しかし、アトラの胸の中はその透明とは裏腹に、ぐるぐるとした暗い感情が大半を占めていた。

「…王宮の、騎士………」

ぼつりとつぶやいた言葉は空気中にあえなく消える。湖ではぴちゅんと魚が跳ね、波紋を生んでいた。

アトラが気になっていたのは、言うまでも無く先程の男の発言だった。

「王宮の人なら、…僕のこと知ってるよね………」

何処を映しているか分からない白い布の下、アトラは目をつむる。ぐるりとした混沌が自分の中に渦巻き、暗雲が立ち込めてくる。

なんとなくあの青年の任務とやらの内容は、分かる。

というか、ソレ以外にこのような場所に来る理由が思い浮かばない。まして彼は王に仕える者。間違いはないだろう

「……………まったく、」

アトラは嘆息した。しゃがみこんだままの身体が、やたら重い。せつかく久しぶりに人に会えたというのに、台無しな気分だ

もう少しで、あともう少しで終わるのに。なんてせつかな連中だろう。

あと、七日くらい、待ってはくれないものか

どうにもすぐれない気分のまま無言で座りこんでいたアトラは、やがてすくっと立ち上がり、再び自宅である小屋に戻った。

「戻ったよ」

「そうか」

そっけない声かけに、そっけない返事。アトラは水のたっぷり入った水桶をベッドのわきに置いた。ルディはそれをじっと見る。

「……ところで、坊主。」

「アトラね。」

「どっちでもいいだろう。」

アトラが小さな薬箱から包帯を取り出していると声がかかった。アトラは振り向き、答える。

「…何？」

「少し聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「だから、何だよ？」

「どうして、目の見えない振りをしてるんだ？」

唐突な質問。瞬間、ガタンと箱がアトラの手から滑り落ちた。

しまった、と気付いた時にはもう遅い。ルディはその目に確信の色を滲ませていた。

「ふん、やはりな。」

「っ、な、なに言ってるの？僕は盲目だって……」

「演技が下手過ぎるな。目が不自由ならこんなに上手に包帯を巻けるわけがない。それに」

ニヤリ、と男は口角を上げる。

「さっき、お前は俺のことを『黒髪、赤眼』と言っただろう？」

「あ………」

目が見えなければ色も分かるはずがない。興奮していて口をつい滑らせてしまっていたのだ。

初歩的なミスを指摘され、アトラは顔を赤くした。

「それで、どうしてこんな布を巻いているんだ？」

「い……いや、これはその……」

しどろもどろに言葉を濁すアトラに、ルディはゆっくりと手を伸ばした。それが顔のすぐ横まできて、アトラはビクツと身体を震わせる。

「さ、触るな！」

「別に、目には問題ないのだろう？取って見せてみる。」

「っみ、見られたくないんだ！ほら、僕、不細工だから……！」

「いいから、」

ルディは強引に小さな身体をベッドの方に引きよせ、ぐいっと布の先端を引っ張る。

彼の怪我人とは思えないほどの力にアトラは驚き、そして。

「あ。」

はらりと。あっけなくアトラの顔を覆っていたものは解かれた。

「……！！」

真っ白な布が宙を舞う中、両者は初めて互いに顔を合わせる。しかし目を見開き絶句したのは、紐解いたルディの方だった。

きんいろが、見えた。

白い背景に浮かぶアトラの顔の造作は、はっとするほど整っていたが、それよりも、何よりも強烈に目に焼き付いたのは

夜半の月を思わせる、黄金色の両眼だった。

「……っ、」

あまりの美しさに、ルディは不覚にもしばし目を奪われたまま固まってしまう。しかし、同時に、それはこの世界のどの場所にも存在しえない色だと理解していた。

「……あーあ、ばれちゃった、か。」

アトラのその声に、男は金縛りが解けたように相手を見返した。

やはり、見間違いではない。己を覗き見るその双眸は、金の光を宿している。

「…お前、その瞳は……」

驚愕に声がかすれ、震える。

対するアトラは凜と澄んだ目をして、しかしそれ以上に色のない表情で彼を見ていた。

「あれ、ルデイさんは知らなかったのかな？」

「……？」

「どうせ、他に聞きたいことって、『何故僕がここに一人で住んでいるか』でしょ？」

「…ああ。それに……」

「ん？」

「どうして自分の死について知りたがったんだ？自殺志願者……というわけでもあるまい。」

「……………」

アトラはくすりと笑った。

「…いや？そんなんじゃないよ。できれば生きていたいと思っしね。」

「…なら……」まとめて、答えようか。「」

カタリと音を立て、アトラはルデイの正面に立った。ちょうど背景に窓が見える。

青空の中に、月。幻想的な色合い。

「僕はね。」

ふわりと、長い髪が舞う。

「昔、魔女に呪いをかけられてね、もうすぐ死ぬんだ。王様はそれまで僕を殺さないように、この森に閉じ込めたのさ。」

白い歯をのぞかせてアトラはきれいに笑った。

しかし同時に、その双眸の月がかすかに滲んでいたのをルディは気付いていた。

「……死ぬ、だと？」

「うん、そうだよー。」

まるで日常会話のように何気なく肯定したアトラは、からからと喉を鳴らして笑う。

一方、ルディはその顔を怪訝そうに凝視していた。

…呪い？魔女？なんとも気になるワードが並べ立てられ、男の脳は混乱し続ける。

「なぜ、そんな……いや、」

すぐにでも問い質したく思い、ルディは身を乗り出し掛けたが、彼はまず目の前の事項から整理することに改めた。すっと人差し指を指しだし、アトラに向ける。

「お前………女、だったのか。」

「ん？そつだよ？」

くると髪を揺らした少女は、キョトン、とした顔を作った。

そう、彼が今まで少年だと思い込んでいたこの人は、どこからどうみても少女　しかもかなりの美少女、であった。改めてルディは目の前の、アトラと名乗る人物を見る。

ふんわりとした栗色の髪は腰近くまであり、すつと通った鼻、薄紅色の小さな唇、白い肌。
そして、やはり目につく黄金色の瞳は爛爛と輝いていた。

すべてが彼女を彼女たらしめている要素。
今となればルディは何故自分がこの少女のことを少年と思ったのか不思議なくらいだった。

「あれ？気付かなかったの、ルディさん。僕、女の子だよ？」

少女は、にまにまと嫌にねちっこい笑みを浮かべた。
馬鹿にされたような口調で言われたルディは、むっとした顔を作り、少々八つ当たり気味に漏らす。

「……その、自分のことを『僕』と呼ぶからだろう。何故女の一人称を使わないんだ。」

そつだ、自分がアトラを男だと判断したのはその話し方や態度だった。だから気付かなくても仕方がない
そんな風に、ある種自分に向けての言い訳のように考えていると、アトラが首を傾げ、質問してきた。

「……え？女の方は『僕』と言わないのかい？」
「な、」

ルディの思考がしばし断絶される。またしても突飛な発言だ。

「……当り前だろう。」

何とか反応してみせたものの、ルディはおっかなびっくり、といった感情を隠せない。

アトラの方を見るが、彼女はふざけている様子も無く、真剣な顔をしていた。

「…そうなんだ、知らなかった。えー、ホントにいないの？そういうヒト。」

「いるには、いるかもしれないが……一般的ではないだろう。」

「でも僕が読んだ小説の主人公は『僕』と言ってた。」

「…それは、単に物語の主人公だからだろう。」

そこまで話して、ルディはまたちらりとアトラと目を合わせた。

彼女の方は、えーそうなんだー、などと軽口をたたきながら何やら納得している様子。

一体、何を考えているんだ……。

一人称など、親や周りに感化されて自然と身に着くもの。

何故そのような当たり前のことも知らないのか？先程から話している度に謎が増える。この少女は、本当に何者なんだろうか。

ルディは知らないことが多すぎて、少し疲れてしまった自分に気付

いた。ため息交じりに肩を回す。

「んー、やっぱりダメだね。」

「…?」

すると、アトラは空間に向かってぽつりとつぶやいた。ぼんやりと、ひとり言のような口調で。

ルディはまた何か始まったのか、と耳を傾ける。

「いや、これでも結構頑張ったんだよ？勉強。」

「…は?」

「言葉は支障なく話せるし、字も読めるし。経済や歴史も読んだんだよ?」

「いや…だから何の話だ?」

コイツはいきなり突拍子もなく話始めるから対処に困る、とルディがストップをかける。アトラは複雑な顔で腕を組んだ。

「…僕を構成する知識は全部、その辺にある本から拾ってきたんだよ。」

「…本?」

アトラは指で奥にある本棚を指す。みると、そこには狭い室内をさらに狭く見せるほど、天井から床までみっちり書物が詰まっていた。棚に入りきらなかった分は、文字通りそこらに転がっているようだ。

「……一応、全部目を通したんだけどさ。やっぱり書物じゃ限界あるね。僕はまだまだ非常識みたいだ。情けないよ、全く。」

「…これ、全部、か?」

「そ。：時間なら、腐るほどあったからね。」

そう言った彼女は、少し寂しそうに笑う。しかし、最後には顔を俯かせてしまった。

ルディと話していると、自分でも話がかみ合っていないと思うことが多々ある。それを、疎ましく感じるのだ。

お前は違う、と言われているみたいで。

そして、それを甘受するもうひとりの自分がいることも、どうしようもない事実で。

「……なあ、お前……」

それを聞いて、ルデイがおもむろに声をかける。

「……何？」

「……いつから、ここに住んでいるんだ？」

「4つのときから、かな。もうすぐ14年になるよ。」

「……………」

バカな。そんな幼子のころから、一人でこんな所にいるなんて。ただよう異常さにルデイは目を見張った。

謎。この少女は謎に包まれすぎている。

未だ床の木目を映す瞳の光は暗く曇っていて、何故か落ち着かない。ルデイの感情は、荒く波だった。

知りたい。

先程の『呪い』発言も、それはもう気になるのだが、何よりも、このアトラという人間について、知りたい。それほどまでに興味を惹かれているのだ。

会って間もないというのに、何故このようなことを思うのか。

ルデイは、そんな複雑な気持ちの自分を受容するのにはばしの時間

を要したが、やがて再び口を開いた。

「……坊主、」

「……いや、だからアトラね。坊主でもないし。」

「ああ、では、アトラ。」

ルディの赤眼がアトラを映す。その中で、きよとん、とした顔の少女が首を傾げていた。

「なに？」

「よければ、お前のその呪いとやら、俺に話してくれないか？」

「……え？」

アトラはきれいに整った眉をひそめた。

「あれ、何で？ルディさん、僕のこと知ってるんじゃないの？」

「初耳だが。」

「てつきり、任務つてやつでここまで来たんだと思ってた。」

「違う。俺の仕事はお前の一件とは全く関わりがない。…騎士と言つても、色々と仕事があるのでな。」

「へー、そうなんだ。」

アトラは、納得したように頷いた。

「……んー、でも、さ。」

ふと、少女は考え込むようになしぐさをする。頭を掻き、気まずそうに明後日の方を向いた。

マズい。余計なこと話しすぎたかも。

アトラは、またしても軽率な自分の発言に、静かに後悔した。

「なんだ。」

「あの、他言無用らしいんだよね。このハナシ。あんまり不用意に話しちゃダメっていうか……」

「……口は固いほうだが？」

「いやいや、コツカキミツってやつらしいし。やつぱり……」

アトラはもごもごといいながら直接的ではないにしろ、やんわりと否定の意を伝える。

あからさまに焦る様子の相手を見て、ルディは眉間にしわを寄せた。

……確かに、少女は秘密を易々と他人に話はしないだろう。

しかも　自分で言うのも何だが　突然現れた、かなり怪しい人物に。

でも、

「……なら、交換条件だ。」

「……は？」

「お前がそれを教えてくれるのなら、俺はお前の望みをひとつ、叶えてやるぞ。」

ルディは荘厳な雰囲気を変え、アトラを真っ直ぐに見た。

気になってしまったのだから、知らぬふりなどもう出来ない。

この少女の正体、そしてそれが孕んでいる大きな謎について、知りたい。

それに、この少女が嘘をついているようにも見えない。もしかした

ら本当に王国が抱えている重大な国家機密を知ることができるかもしれない。

何としてでも聞きだしたい、とルディは考えていた。

「……………」。

しばらくの静寂が辺りを包み、屋内で身動きをするものはいない。外からの強い疾風が、窓枠をガタガタと揺らしていた。

「……………」

先に動いたのは、アトラの方。ルディは黙ってその返答を待つ

「ふ、ははははっ！」

が、突如彼女は息を吐きだして笑いだした。

「……………」？

……………狂ったか？

ルディはついには腹を抱え出した少女に、冷めた眼差しを送った。しかし、アトラは視線を気に留めることも無く、歯をむき出しにして笑っていた。

「あは、ははは！何それ！『望みを叶える』とかアンタ、神様のつもりかい？」

「……まあ、出来ることに限りはあるが、騎士に二言はない。」

「ぶふっ、マジメだね、ルディさんは！」

「……………」。

ルディは途端に不機嫌そうに口を結び、黙った。
…苦し紛れの提案ではあったが、ここまで笑われるとは。どうにも
格好がつかない上に失敗のようだ。
やはり下らない二心など考えなければよかったか

意気消沈するルディが、がくりと頭を垂れる。それを見て、少女は
また口を開いた。

「いーよ。」

「…は？」

だが、しかし。それは、およそ彼の予想とはかけ離れたセリフで。
男は耳を疑う。

「…だから、『ノロイ』のこと、聞きたいんでしょ？話してあげる
よ。」

さらに、少女の唇が弧を描きながら放った言葉にルディは目を丸く
した。

な？

「いい…のか？」

「別に、僕が王様に義理だてする必要ないし。どーせならもう話し
ちやおうと思って。」

にしし、と何らかを企むようにアトラは呟いた。

「アンタの言葉が嬉しかったから。そのお礼だよ。」

例え、叶うはずのない願いでも。ただ、そのひとことだけで。

「じゃあ、早速……」そのまえに。」

身を乗り出す勢いで聞いて来るルディを、アトラは手で制した。

「ご飯、食べようよ。お腹空いてるでしょ？」

急に意識したからか、ただよってくる、鼻孔をくすぐる美味しそうな煮炊きのにおい。

空腹を訴えていた腹を撫で、ルディは無言で頷いていた。

昔も昔、大昔。この世界が破壊と殺戮の、混沌の渦中にあった頃のお話。

ある日、ある時。突然に、一人の魔女が地上に姿を現した。

魔女は地に舞い降りるや、その強大なる魔力を用いて蔓延^{ハビコ}っていた

人間同士の戦いを瞬く間に片づけた。強制的に戦争が終了した世界に争いは無くなった。

人間たちは魔女の、あまりにも大きな力に恐怖したが、同時に畏敬の念を抱いてもいた。長年続いていた彼らの戦争が、彼女の手によって、あっさりと終結したからだ。

魔女は神とあがめられ、人々から絶大なる支持を得た。

しかし、それは全くの誤解であった。

人間たちにとって、本当の恐怖はここから始まったのだ。

魔女は世界に平和が戻ると、人間たちに見返りを要求し始めた。

それは国であったり、宝珠であったり、珍味なる食物であったり：

彼女の意向により毎回変わったが、数年に一度要求されるソレはいずれも無理難題であったため、人間たちを困らせた。

だが、要求を断ることはできない。

その言に逆らうと、忽ちにして天変地異が世界を襲い、人々は死に追いやられることとなった。

度々なされる魔女の搾取により、大地は疲弊し、草木は枯れ、人々は疲れ果てた。

しかし再び暗黒の時代が訪れるか、と誰もが諦めた頃。

なす術もなく魔女のいいなりになっていた人間たちの前に、一人の魔術師が立ち上がった。

「このまま魔女に従っていても、やがて世界が滅びる。その前に、我が命を変えてでも彼奴を倒して見せよう。」

そう勇猛果敢に宣言した魔術師は、魔女に決闘を申し込んだ。

決戦は、三日三晩続いた。空には雷鳴が轟き、大地は割れ、大海原
は荒れ狂うほどの熾烈な戦いであった。

そして、迎えた四日目の朝。ついに魔女は力尽きて倒れ、魔術師に
彼女を打ち滅ぼす機会が巡ってきた。

しかし、魔術師の方にも完全に魔女を消滅させるほどの魔力は残っ
ていなかった。

そこで、彼は巨大な紋章を描き、魔女が悠久の眠りにつくように封
印した。光に包まれていった魔女の身体は、やがて紋章に呑み込ま
れた。完全に紋章を描き終えると、魔術師も力尽き、そのまま亡き
者となった。

魔女を封印した魔術師は英雄と称えられ、人々は彼の死を悼み、悲
しんだ。そして、魔術師の栄誉は後の世まで語り継がれることとな
った。

昔、昔の伝説である

……

「……と、ユレーヴィア創世記第五章の話は知ってるよね？」
「……ああ、聞いたことはある。」

カチャカチャと、木でできた食器やスプーンが音を立てる。ルディは質素ながら深い味わいのあるスープに舌鼓を打ちながら、アトラの話聞いていた。アトラもパンをちぎりながら、何気ない様子で続ける。

「あれさ、嘘なんだって。」

「……へえ、そうか。」

ルディは軽い口調で受け答え、また新たな皿に手を伸ばした。

大体、伝承や伝説など、ほとんどが夢物語のようなものである。アトラの話すそれが嘘だろうが何だろうが、少しも不思議ではない。

「……まあ伝説なんて、誰かが作り出した絵空事がほとんどだし……」

「いや、違う。」

しかし、次の男のセリフは、瞬く間に遮られた。

その鋭い指摘にぴた、とルディは動きを止め、自身を見つめる双子の月を見た。

「正確に言えば、半分嘘ってこと。魔女は本当にいたし、魔術師と

三日間戦ったというのもホントだよ。」

「……じゃあ、何が嘘なんだ？」

ルデイのもっともな質問。アトラは頬杖をつくと、またニヤリと笑みを作った。そして、言う。

「魔術師は、魔女に勝てなかったのさ。」

物語の、真実を。

「……………な？」

それを受け、ルデイは呆けたような声を出す。故に、直後の静寂がやけに静かであった。

どういう、ことだ？

男は、正直に浮かんだ疑問をすんでのところ、のみ込む。

いや、待て。こいつの言うことが本当なら、魔女は負けなかった。人間側が、負けた。つまり、そこから導き出される答えは

「…魔女は、封印されていないということか？」

「うん、正解。」

言いながら、アトラはあやすようにパチパチと手を叩いた。

ほら、誰も知らない真実が、ここに。

「…何故だ、それこそ冗談だろう?」

…その昔、世界を恐怖に陥れたという魔女が実在し、封印も為されなかった。それが本当なら、世界はとつくの昔に滅んだはずだ。

しかし、このユレーヴィア大陸はきつちり存在しているし、どこもかしこも現時点では平和そのものはず。だから、不可解ではない。…この少女の言うことが。

ルディは眉をしかめながら目の前の少女を睨む。対するアトラはすつと目を細め、静かに返答した。

「…そう言ってもね。魔女は、確かにいるんだよ…今もまだ。」

「まだ、生きているのか?」

「うん。僕、会ったことあるもん。」

「……………」

またしても唐突な発言。しかし、ルディは多少の驚きは見せたものの、表情は変えなかった。

というのも、すでに、どこまで秘密を隠し持つてるんだこいつは、と呆れの感情しかでてこなかったのだ。

「魔女に、会った…?」

「うん。小さいころに、だけどね。」

「……………それで、どうなったんだ?」

「ん……………」

アトラは微かに言い淀んだが、すぐにもとの口調で言い放った。

「……あまり覚えてないんだけど……多分そのとき、呪いをかけられたんだと思うよ?」

その、不自然なほど明るい口調で。

「……ああ?」

ルディは意味が分からない、と言った風に不満げな声を漏らす。それを聞き、アトラは委縮した。

まずい、話が先走ったか。ああ、もう。会話って何でこんなに難しいんだろう!

「……えっと、順を追って説明するとね。」

アトラはルディから送られてくる冷めた視線をひしひしと肌で感じ、慌てて初めから話すことにした。取り繕ったようにぴんと人差し指を立てる。

「魔女は魔術師に勝った。でも、その三日も続いた闘いのせいで、この世界で暴れ回ったのが魔界の王に伝わってしまったんだって。『ユレーヴィアの搾取を続けて滅ぼしてしまっはセカイのバランスが崩れる』」

魔界の王はそう言って魔女に敵しいお灸をすえた。だから、こちらに取り立てに来るのは百年に一回、って妥協したんだ。」

「……百年に、一回。……完全に禁止にできなかったのか?」

「さあ、僕は知らないな。でも、最終的には魔女に決定権があったわけだし、レフィノアの王も他国もそれで承諾したらしい。」

「……………ほづ。」

そこまで言うと、ルデイは何やら考え込むような仕草を見せた。アトラはそれを覗きこむ。

「ルデイ、さん？」

「……………ん、ああ。続けてくれ。」

すぐに顔を上げてくれたものの、まだ考え事の途中のようだ。アトラは首を傾げながらも先を話すことにした。

「でね、僕が魔女に会ったのはその『百年に一度』の時だったんだって。」

「……………！それは、」

「あ、気付いたかな？」

明るい室内にまた暖かな日差しが差し込む。アトラの両眼がきらりと猫のように光った。

「……………察しの通り、この異質な瞳をもつ僕が今回の供物に選ばれたってわけさ。」

「お前が、供物…生贄、だと？」

「あれ？あんまり驚いてないみたいだね？」

「…いや、十分驚いてる。」

その証拠に、ルディはしばらく思考を止めてしまっていた。ある程度答えの予想はしていたものの、それは考えうる限り最も非現実的、そして残酷な解答だった。

「…では、件の魔女は幼いころのお前に会い、その時に生贄に選んだのか？」

「うん。まあ、正確に言うと『18歳の僕』を、だ。魔女は僕が成人したら貰いうけると言っていた。」

「……18。」

この世界は18歳になると成人すると決まっている。

確かに、イケニエというものは昔から若い娘から選出されていたので、別段その交換条件はおかしくない。

「……いや、待て。18の時に供物としてささげられる、ということ
は……」

そこで、ルディはアトラの言わんとすることが理解できた。眉を寄せた神妙な面持ちのまま顔を上げる。

「……そうか。」

「ん？」

男からじっと観察されているような眼差しを向けられ、アトラは一瞬身体が引きつったような気がした。

分かつちゃったんだろうな。勘は良さそうだもん、この人。

「…何？」

アトラはぎこちない笑みを浮かべ、先を促した。
ドキドキと心臓は鳴るのに、内心ではそれでも可笑しそうに嘲笑っ
ている自分がいるのに気付いていた。

だから、なのか。

「…アトラ、お前の呪いは、『18になったら死ぬ』ということ、
だろう?」

「そうだよ。」

紛れもない現実が叩きつけられても、少女の力才は貼り付けられた
仮面のように、少しも変わりはしなかった。

「『18歳の誕生日を迎えたその瞬間、汝の命は絶えるだろう。』」

彼女はそう最後に言い残したらしいよ。…ま、その意味では。”生

”贄じゃないけどね。」

「……………」

ルディは無言でアトラを見つめた。

さつきから全くと言っていいほど表情が歪まない。無表情ではない
のに、随分と無機質な感じがする。

そのうつすらほほ笑んでいる顔は偽物のように感じられた。

秘密と言った割にはずいぶんあっさりと答えてくれたものだ。
しかも、この少女は

「……………あと、何日だ?」

「今日を入れて、7日。いやー、だいぶ近付いてきたよね。」

数日のうちに呪い殺されると、言っているのに。

「……………」
「……………」

沈黙が、流れる。しばし両者は互いに無言を貫いていた。
アトラはルディの出方をうかがい待っているようだったし、ルディの方も何やら考え込んでいた。

静かな森の奥。少女と青年は、傍から見ればのどかな空気に身を
ひたしているようだった。

「…それで、お前はどうするんだ？」

ようやく口を開いたのはルディの方だった。
それは『なにを』という目的語が欠けていたが、アトラには彼が何を言おうとしているのか十二分に理解できた。

アトラは、食べ終わった食器を簡易の流し場に移しながら、少し考
え　しかし、すぐに思考を停止し、

「どつとも、しないよ。」

苦笑気味に、そう言った。

ボソリと呟いた声は流れ出た水の音に消え、無音の空気が場を形作

った。

「……………」

「…別に、どうもしない。ただ待つだけだよ。」

死を。

水を跳ねながら口の形だけでその二字を伝えるアトラ。それを見て、ルデイは静かに口を開いた。

「何故。死にたくはないと言ってたではないか。」

「死にたくないよ。僕だって普通の人間だもん。」

「なら」「でも、」

きゅ、と蛇口をひねる。突如、アトラは振り向きなりずいっとルデイの方に詰め寄った。真っ直ぐな視線が男を貫く。

「どうしようも、ないでしょ。閉じ込められてるんだから。」

「閉じ込められてる?」

その双眸の強い光に若干引きながら、ルデイは怪訝そうな表情を作る。

と、ああ、そういえば。と、男はついさっき少女が言っていたことを思い出した。

「…先程、その『呪い』で死ぬまで、ここに閉じ込められたんだとか言っていたか。」

「うん。」

「だが、外には出られるんだろう?檻などないのだから。」

「……ん、ああそっか。言ってたなかったね。正確には、この森に閉

じ込められているのさ。」

そう言うと、アトラはおもむろに自身の靴を脱ぎ、ルディに裸足となった足を見せた。

ルディも素直にそれを覗きこむ

「…分かるかな、これ。」

「これは、」

瞬間、男は思わず驚愕に目を開いた。

そこには、アトラの両足にはびっしりと細かな紋章が描かれていた。足の甲から足首にかけ描かれた古代文字で形成された禍々しい紋章の陣。

一目見ただけで、相手が込んでいるものだと分かった。

「『枷』さ。術師が空間の範囲を定め、そこから抜け出そうとする」と紋章が発動し、結界が出現する。」

呟いたアトラの声色は少々苦々しく聞こえた。目線を上げたルディの赤い瞳と目が合う。

「その範囲はこの『聖邪の森』。だから此処には誰も来ないし、僕は何処へも行けないのさ。」

この世界の人間は誰でも多少なりとも魔力を有している。しかし、それを用いて魔術を発動させるには才能とある程度の学が必要である。

魔術とは、基本的に古代文字で形成される紋章に魔力を注ぎ込み、術式を展開させるという方法をとる。

然るべき呪文を唱えると紋章が宙や特定の場所に出現し、効力が発揮されるのだ。

ただし、発動する魔術はそのヒトの有する魔力の量により程度は異なる。

魔術の効力は紋章が細かく、複雑になるほど高い。紋章が複雑化するほど注ぎ込む魔力の量も増加し、より強力な拘束力が必要となるからである。

また、それと同時に、発動時により長い詠唱を必要とする。

よって魔術が使えるのは紋章学を学び、術を展開する修行を積み、またそれに見合った魔力を有する一部のエリートのみであった。

ルディはもう一度、アトラの足に巻き付く文字の羅列に目を移した。非常に細かく、著されている古代文字も正確である。ひとつひとつ均一に魔力が注ぎ込まれていることも肌で感じられた。

「…はずれない、のか？」

「そうだね。僕も10年くらい前からずっと試してんだけど、無理。森から出ようとすると結界に弾かれてしまうんだ。」

アトラは思い出す。

いきなりこの小屋に放り込まれた当初。泣きながら森中を走り回るが、しかし結界に阻まれて途方に暮れた幼いころの、無知過ぎた自分を。

それもそのはず。

一目見れば誰でもその精巧さが分かるほど、複雑な魔術。恐らく相当優秀な魔術師がかけたに相違ない。魔力の扱い方も知らないアトラにどうこうでできることではなかった。

「……なるほど。」

ルディは納得したように呟き、最後のパンの欠片を口に放り込んだ。

「王はお前をここに閉じ込め、時が来るまで国民にはごまかすつもりだったんだな……?」

「時が来ても、だよ。そもそも魔女が生きてるなんてこと自体内緒にしておきたいだろうしね。」

「……………」

そう、つまりはそういうことなのである。

繁栄を続けるレフィノア王国。

しかし、かの伝説の魔女が生存し、未だ搾取されているなどと国民に知られれば、面子もなにもあったものではない。また、混乱を生んでしまうのみ。

だから、生贄を森の奥に閉じ込めた。

時が来て死ぬまで、秘密を守るように。誰にも知られぬように。

確かに、アトラの存在は国の抱える『国家機密』そのものだったのだ。

口をつぐむアトラ。むっつりと黙ったままゆったりと椅子に腰かけているルディ。

「……………それで。」

外に視線を向けていたルディは少女に顔を向けないまま呟いた。

「それで、お前は どうするんだ？」

先程と、まったく同じセリフを。

「……………は？」

アトラは目を丸くし、素っ頓狂な声を上げた。

なに、この人。話を聞いてなかったわけ？

「…だからさあ、何しようにもどーにもできないんだってば。しかもあと7日だよ？命。」

「……………。」
「4、5年前ならまだしも今から無駄な夢持ったって、仕方ないじゃないか。」

はあ、と息をつく少女。

焦りはしない。嘆きもしない。だって、あとたった7日なんだから。

もう何も望まない。

てか、望めないだろ？こんな短時間で、僕に何をしろって言うのさ？

何も分かつちやいない、この野郎。

不快なモヤモヤを抱えたまま、アトラはちらりと目の前に座るルディを仰ぎ見た。

が、彼は仏頂面のまま眉すら動かさずに頬杖をついていた。

「お前は、阿呆か。」

そして、アトラにそう言い放った。何でもないように……いや、少し馬鹿にしたように。しかも口調のわりに全く表情が崩れていなかった。

は？

アトラはしばらく、口を開けたまま放心する。

「そんなことは聞いていない。お前は、どうしたいんだ？」

しかし、続けて吐き出された言葉に今度はドクンと心臓が動いた気がした。

「本当は、外に出たいんだろう？」

「！」

「何度も試したんだろう？結界に阻まれると分かっているにも。ここ

から逃れようとした。」

「……………」

「違うのか？」

突き刺さるような赤の視線。アトラはしかしその強すぎる眼光に耐えられなかった。

その黄金色の瞳を曇らせ、俯かせる。

「違う。そう、僕は出たい。」

飛び出したい。こんな所、抜け出したいに決まってる。

でも、それでも分かっているから。なにを望んだって、叶わないから。

僕は理想なんか、捨てるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4964y/>

Seven Days Journey

2011年11月18日12時50分発行